

## 卒業生総代の辞

本日は、松尾総長をはじめ、諸先生方、大学職員の皆様を支えられながら、名古屋大学卒業の日を迎えられたことを、卒業生を代表いたしまして、心より御礼申し上げます。現在、大学を含めた様々な機関が新型コロナウイルス感染症拡大を防ぐための対応に追われる中で、松尾総長より映像を通して私達卒業生に向けて激励の御言葉を賜り、その温かなお心遣いに、重ねて御礼申し上げます。

名古屋大学のキャンパスには、本日まで勉強や研究、課外活動などの多くの体験をして、それぞれが愛おしむ大学生活がありました。大半の卒業生とは異なり、二年前に三次編入生として名古屋大学に入学した私もこのキャンパスで過ごした日々を愛おしく思うひとりです。名古屋大学で心理学を学び研究していくことへの胸の高鳴りと、新しい環境で過ごしていくのかという一抹の不安、様々な感情を抱えて出席した入学式を懐かしく思います。複雑な思いも束の間、三次編入生の仲間はバックグラウンドが多種多様であり、個性的で魅力的な人ばかりであったので、出会ってすぐに日々が楽しく彩られ、不安はいつの間にか消え去っていました。一年生の頃から在学されていた学生の皆さんも、交遊する会を開いてくださったたり、授業の内容や進路選択について話してくださったたりと、優しい方々ばかりで打ち解けるのに時間はあまり要りませんでした。海外の大学に留学する方や名古屋大学に留学されている方との出会いもあり、グローバルな視野を持ち、熱心に励む姿勢に刺激を受けました。三年生の春学期は、履修登録をはじめとする大学のシステムに慣れるのに苦戦しながら、一年生や二年生の方と共に選択必修の授業を受講したことや、大学院生の方も受講される授業を受講することなどがありました。三年生の秋学期からは、グループで研究をする授業や、卒業論文として自分の研究を組み立てる授業がはじまり、研究の難しさについて仲間と悩みを吐露し合い、自分の興味は何か、それは本当に研究に値する問いなのかと自問自答を繰り返す日々を送っていました。研究テーマを決める上で大変苦しみました。先生方やTAの方々をサポートしてくださったことで研究を進めることができました。四年生になると、所属する教育学部の授業に加えて、興味のある他学部での授業を受講するほか、教育実習や大学院入試の準備をしながら、卒業論文に向けて研究活動をしておりました。他学部の授業では人文学・社会科学に触れ、そこで問われてきたことや人間観と、自分の専攻する心理学での問いとの間に共通項を見つけ、先人の積み上げた知を学問の分野を問わず幅広く学ぶことの意義を感じるようになりました。学部の有志で勉強会や論文講読をすることもあり、授業以外での学びも豊かにあった時期でもありました。一年間かけて研究したものやひとつの論文となり、一月に卒業論文の発表会を行なったときは得も言われぬ達成感がありました。思い返せば、過ごした時間に比して濃密な日々だったと思います。

大学院への進学を当初から希望していた私は、研究活動については特に力を入れておりました。先生方や大学院生の方、同じ学部の仲間など様々な方がご尽力下さったことで、研究活動はより実りのあるものとなりました。例えば、卒業論文では三つの実験を行なうことができました。これは、研究テーマが固まってすぐにデータを取る準備をさせていただき、また、実験参加者数が足りない時には先生や大学院生の方が担当される授業で募集させていただくといった周囲の方の協力に支えられています。そして、毎実験の結果を受けて、次の実験をどのように改善するかについて、指導教員の先生や研究室の皆さんが多くのアドバイスをしてくださったからこそ、実現できたのだと思います。卒業論文全編を英語で執筆し、一部の研究は学術論文誌に投稿することもできました。まだまだ未熟な私に先生方がご協力くださり、推敲を重ねながらも、学部生のうちから自分の研究が海外に届くような発信をし、査読プロセスを経験できたのは、これからも研究活動をしていく上で大変貴重だったと思います。論文化するにあたり、データの分析も繰り返し行ないましたが、研究室間の垣

根の低い教育学部では、統計学をご専門とされる先生に何度もご指導をさせていただくことができました。さらに、教育学部の卒業論文優秀発表賞をいただいたほか、学修への取り組み部門で名古屋大学総長顕彰を受けるなど、研究活動への取り組みが評価されるという経験もさせていただきました。卒業論文に関すること以外にも、他学部の先生の研究のお手伝いをする機会もあり、研究方法を実践的に学ぶことができました。学会の主催するサマースクールに参加したり、心理学の勉強会を自主的に行なったり、先生にお声かけして統計学の自主ゼミを行なったりと、学ぶことに貪欲になることもできました。同じ志を持つ意欲の高い仲間と出会い、悩みや夢を語りながら共に切磋琢磨する日々を過ごすことができたこと、そして学生の興味関心に先生方が全力で応えて下さったことで得たものは、かけがえない財産です。

実際の研究活動や、出会った方から教えていただいたこと、そして「勇気ある知識人」を育む名古屋大学の教育を通して、研究に対する視野や考え方が大きく広がった今、私は、研究はひとりで行なうものではない、と考えています。研究を単なる自己満足で終らせずに、社会的意義のある新たな知見を生み出すものにするためには、何が問うべき問いなのかを考え、絶え間なく努力しなければなりません。研究課題を見つげるまでの過程はとも地道で孤独なように思えますが、先行研究という膨大な知識の海を泳ぐことは、過去の研究者達と対話することでもあります。このような対話なしには「巨人の肩の上に乗る」ことはできません。私たちは、各々の人生経験を背景に、個人単位で興味関心を持っていきますが、自分だけの視点に収束し、凝り固まってしまうことを防ぐために、研究においては様々な目の借りで、多角的に問いに切り込んでいくことも必要です。研究領域が近い人だけでなく、多種多様な場に自ら繰り出るなどして、領域の壁を乗り越えた繋がりを持ち、様々な人と議論することによって研究は磨き上げられていきます。努力を惜しまず、研究を進めてきたにもかかわらず、時にはネガティブな結果や評価を得ることもあります。必ずしも研究自体の価値がないというわけではありません。その結果や評価を契機として、問いや課題が新たに生まれることもあるでしょう。もしかすると、その問いは、ひとりの力ではすぐに解決されるものではなく、後世に先行研究の海を泳ぐ者が、研究を通して時代を超えた対話を私たちと行なうことで、ようやく解決される問いなのかもしれません。このように、研究は決してひとりで行なうものではなく、時代を縦横して多くの人々と対話をしつつ、洗練させていくプロセスを繰り返すことにより営まれるものなのだと思います。たしかに、ひとつの研究で得られた知見が社会に実装できるほどになるまでには、多くの知を必要とし、長く時間がかかるでしょう。成果や実益を求めて、短絡的に研究のプロセスをおざなりにして、過去や同時代、未来に生きる者との繋がりを失ってしまわぬように、ひとりひとりが、社会が、研究そのものの価値を心に留めておくことが大切だと考えます。

来る四月から、社会人の仲間入りをして仕事に邁進する者、大学院へ進学し研究の道を究めていく者と十人十色ではありますが、名古屋大学での充実した学び、かけがえのない出会い、数々の思い出の詰まった愛しき日々を胸に、これからも精進していききたいと思えます。

最後になりますが、厳しくも温かいご指導をしてくださった先生方、学生生活を支えてくださった大学職員の皆様、共に学び、多くの喜びを共有した友人、経済的にも精神的にもいつも支えてくれた家族、お世話になった全ての大切な方々に心からの感謝を申し上げます。ともに、名古屋大学の一層のご発展を祈念いたしまして、答辞とさせていただきます。

令和二年 三月二十五日

名古屋大学卒業生総代

教育学部人間発達科学科 栗田真帆